

## D-7

### 中世低地ドイツ語コーパスから見るデンマーク語従属節語順への言語接触の影響

大西貴也 (東京大学大学院修士課程)

takayanhyk@gmail.com

**要旨:** ハンザ同盟が影響力を持っていた時期に中世低地ドイツ語がデンマーク語を含む大陸スカンディナヴィア諸語と接触し、影響を与えたことは比較的良好に知られている。本発表では、中世低地ドイツ語のコーパスを用いて、デンマーク語の従属節語順の変化の要因となりうる用例の頻度が高いことを示し、低地ドイツ語が統語面でデンマーク語に影響を与え、動詞の繰り上げを失わせる端緒となった可能性を提示する。北ドイツに地理的に隣接するデンマーク語使用地域へ移住したハンザ商人たちは、同じゲルマン語であるデンマーク語を第二言語として不完全な形で獲得したであろうことと、デンマーク語に元々表面上類似する語順が存在したことが変化を推し進め、再解釈によって変化が起こったと考えられる。

**キーワード:** 中世低地ドイツ語、デンマーク語、歴史統語論、言語接触

#### 1. はじめに

現代デンマーク語の従属節においては、節全体を作用域とする副詞や、否定を表す *ikke* “not” などの語句が定動詞に対して前置される (Allan et al., 2000: 167)。表面上、定動詞第3位の語順を示す。これは、定動詞第2位語順 (以下、V2 語順) を呈する主節とは異なる語順である。従属節の語順が主節と変わらない現代英語や、従属節末尾に定動詞を置く現代ドイツ語と比べると、それらの代表的なゲルマン語とは異なる従属節語順であり、デンマーク語 (を含む大陸スカンディナヴィア諸語) に特徴的な語順であると言える。

##### (1) 英語

...that John *had* probably bought the book. (Platzack, 1986: 186)

##### (2) ドイツ語

...dass John wahrscheinlich das Buch gekauft *hatte*. (Platzack, 1986: 186)

that John probably the book buy.PP have.PST

##### (3) 現代デンマーク語

...at John ofte/ikke/faktisk *spiste* fisk. (Jensen, 2001: 117)

that John often/not/actually eat.PST fish

一方、14世紀以前のデンマーク語文献に見られる従属節では副詞や否定辞が定動詞の後ろに置かれ、少なくとも表面上は主節と同様、V2 語順が一般的だった。

(4) at han ma æi kummæ  
that he can not come

「彼が来られないということ」 (*Jyske Lov*; NKS295, 8vo: 22v)

1500年から1700年のデンマーク語文献の従属節語順を調査した Sundquist (2003) によれば、当該時期には (4) のような古い語順と (3) のような新しい語順とが共存しつつも、時代を下るにつれて、新しい語順を呈する節の割合が増えていることが分かる。こうして、現代の従属節語順が確立するが、変化の開始のタイミングはそれより早い可能性が十分にある。

現代デンマーク語に見られる (3) のような [副詞一定動詞] の語順は、従属節において動詞が移動せず、VP 内にとどまっていると分析される (Jensen, 2001: 117)。それに対し、中世デンマーク語における (4) のような語順は、VP の主要部 V から TP の主要部 T (時制辞) への定動詞の移動が起こっていると分析される。したがって、デンマーク語の歴史においては、従属節における V から T への定動詞の繰り上げ (verb raising, 以下 VR とする) が消失するという形で文法が変化したと言える (cf. Platzack, 1988; Sundquist, 2003)。

このようなデンマーク語の従属節語順の変化が起こりつつあった中世以降の時期は、商業的な都市同盟であるハンザ同盟が力を持ち、北海からバルト海にかけて影響力を持っていた。ハンザ商人が活動していた地域においては、中世低地ドイツ語が交易のための国際語として機能していた (Peters, 2000)。また、1369年以降、ハンザ総会の決議録はラテン語に代わって低地ドイツ語で記されるようになったことが分かっている (Dollinger, 1964; 奥村他訳, 2016: 278)。

当該時期において、スカンディナヴィア諸語と低地ドイツ語との接触があったことはよく知られている。中でも、語彙の借用に関しては豊富な先行研究がある。借用された語彙として、例えば貿易に関する語彙や、*be-*, *ent-*, *er-*, *ge-* などの強勢を持たない動詞の接頭辞が借用されたことが分かっている (Haugen, 1976: 220-221)。また、同じく Haugen (1976) は、(4) のような語順の成立に中世低地ドイツ語の影響がある可能性に言及しているが、その詳細は述べてられていない。語彙の面での影響は低地ドイツ語からデンマーク語の方向において顕著に見られるものであり、統語論における影響も少なくとも同一の方向に働いたと想定できる。

本研究は中世低地ドイツ語から中世デンマーク語への従属節における統語論的影響を調べることを目的とする。中世低地ドイツ語に注目し、コーパスを使って同時期のデンマーク語の従属節語順に影響を与えるような言語データがあったかどうかを調べ、分析を行った。第2節で調査について、第3節で調査結果について述べ、第4節で分析・考察を述べる。第5節はまとめである。

## 2. 調査について

本調査では、“Referenzkorpus Mittelniederdeutsch/Niederrheinisch (1200-1650).” (以下、ReN コーパス) を使用した。調査対象としたのは、デンマークに地理的に近い地域で話されていた、リューベック方言・北低地ザクセン方言・東エルベ方言の3方言の資料である。とりわけ、リューベックはハンザ同盟の中でも中心的な役割を占めており、その方言は文書語として標準語の地位を確立した。低地ザクセン方言はハンザの世界を主に構成し、様々な地域で使われていた。低地ザクセン方言は一時期のデンマークにも根付いた (Dollinger, 1964; 奥村他訳, 2016)。

そして、それらの方言資料のうち、節全体を作用域に取る否定表現 (否定の小辞 *en / ne*, *nicht* “not”, *nicht meer* “not anymore”, *nummer* “never” 等) を含む従属節を抽出して調査した。第1節で述べたように、従属節において VR が起こっているか否かの判断の証拠になるのは否定の意味を含む副詞句だけではないが、本研究では否定辞に絞って調査を行なった。節先頭付近の語順に注目した。

*und* ‘and’, *men* ‘but’ で始まる節も検索対象になっていたが、これらは等位接続詞としての用法が一般

的であるため除外した。また、中世低地ドイツ語では否定の小辞 *en/ne* と否定の副詞 *nicht* が同一の節内で用いられる用法が見られる (Breitbarth, 2014)。同一の節が二重に表示された場合、片方を除外した。

### 3. 調査結果

以下、地域・時代別に調査結果を示す。表 1~3 は、節全体を作用域に取る否定表現を含む従属節について、節先頭付近、すなわち、補文標識直後の語順がどのようになっているかを調べ、その例の出現数を計数したものである。Neg は否定的要素、Pr は代名詞類、Adv は副詞、PP は前置詞、other はその他の要素を表す。例えば、[S-Neg] の場合、節先頭において「主語 - 否定的要素」の語順が見られるということである。

表 1 リューベック方言における従属節先頭の語順

	S-Neg	S-Pr	S-Adv	S-PP	S-other	not S-first	total
1251-1300	1 (20%)	3 (60%)	0 (0%)	0 (0%)	0 (0%)	1 (20%)	5 (100%)
1401-1500	209 (40%)	73 (14%)	44 (8%)	30 (6%)	91 (17%)	75 (14%)	522 (100%)
1501-1550	17 (47%)	3 (8%)	2 (6%)	0 (0%)	8 (22%)	6 (17%)	36 (100%)

表 2 北低地ザクセン方言における従属節先頭の語順

	S-Neg	S-Pr	S-Adv	S-PP	S-other	not S-first	total
1251-1300	7 (24%)	7 (24%)	1 (3%)	3 (10%)	9 (31%)	2 (7%)	29 (100%)
1301-1400	55 (21%)	59 (23%)	7 (3%)	43 (17%)	70 (27%)	26 (10%)	260 (100%)
1401-1500	82 (46%)	18 (10%)	11 (6%)	14 (8%)	21 (12%)	31 (18%)	177 (100%)
1501-1600	38 (22%)	48 (28%)	10 (6%)	8 (5%)	37 (21%)	33 (19%)	174 (100%)
1601-1650	5 (17%)	6 (20%)	5 (17%)	1 (3%)	4 (13%)	9 (30%)	30 (100%)

表 3 東エルベ方言における従属節先頭の語順

	S-Neg	S-Pr	S-Adv	S-PP	S-other	not S-first	total
1301-1400	4 (45%)	1 (11%)	0 (0%)	0 (0%)	3 (33%)	1 (11%)	9 (100%)
1401-1500	11 (13%)	30 (35%)	8 (9%)	1 (1%)	14 (16%)	22 (26%)	86 (100%)
1501-1600	27 (28%)	9 (9%)	9 (9%)	11 (11%)	19 (20%)	22 (23%)	97 (100%)
1601-1650	27 (51%)	4 (8%)	4 (8%)	1 (2%)	4 (8%)	13 (25%)	53 (100%)

また、従属節内で V2 語順になっている例も計数した。

表 4 V2 語順を示す従属節の数 (空欄は該当資料なし)

	1251-1300	1301-1400	1401-1500	1501-1600	1601-1650
リューベック方言	0		23	0	
北低地ザクセン方言	0	2	0	1	0
東エルベ方言		0	0	1	0

また、定動詞の前に否定の小辞 *en / ne* が置かれていて、節の 3 番目に定動詞が現れる節の数も以下に示しておく。*en / ne* が接語であるとすれば、この語順も V2 語順であると分析しうる。

表 5 節先頭の語順が [X-en/ne-V] である従属節の数 (空欄は該当資料なし)

	1251-1300	1301-1400	1401-1500	1501-1600	1601-1650
リューベック方言	2		21	0	
北低地ザクセン方言	0	9	44	0	0
東エルベ方言		0	0	0	0

[S-Neg] かつ非 V2 語順の例文、[S-Pr] かつ非 V2 語順の例文、[S-V]、[S-en/ne-V] の例文を示す。

(5) [S-Neg]

dat he nicht tughet ne hadde  
that he not evidence.PP PTK have.PST

「彼が証言しなかった (こと)」

(北低地ザクセン方言; 1301-1350; Brem.\_StR\_1303,04\_Abschrift)

(6) [S-Pr]

dat me yd nicht seen mochte  
that people it not see could

「それが見えなかった (こと)」

(リューベック方言; 1451-1500; Lüb.\_Passional\_1488)

(7) [S-V]

wente gy wetten nicht de stunde noch den dach  
because you know.PRS not the time and the day

「あなた方はその時も日も知らないのだから」

(リューベック方言; 1451-1500; Lüb.\_Dod.\_Dantz\_1489)

(8) [S-en/ne-V]

Wente ik ne hebbe nenen man  
because I PTK have.PRS no husband

「なぜなら私には夫がないから」

(北低地ザクセン方言; 1451-1500; Buxteh.\_Ev.)

## 4. 分析

### 4.1. 結果の分析

第 3 節で示した結果からは、[S-Pr] の割合が比較的多いことが伺える。一因としては、情報が軽い要素が節の前の方に置かれるということが考えられ、現代標準ドイツ語の語順とも類似している。その一方で、[S-Neg] の語順の割合も全体的に多い。他のカテゴリに比べ、頻度が高いことが見て取れる。また、定動詞の位置に関して言えば、V2 語順を示す従属節は少ないことが分かる。すなわち、否定の意味

を持つ副詞句が定動詞より前に置かれる語順を示す従属節の出現頻度が高かったことが分かる。これは否定表現の後に定動詞を置く現代デンマーク語の従属節語順と類似した語順の傾向であると言え、現代デンマーク語の従属節語順の成立に寄与している可能性が考えられる。

社会的状況に目を向けると、ハンザ商人の活動する北ドイツ地域とデンマーク語使用地域とは隣接しており、多くの低地ドイツ語話者が流入した。スリスヴィでは特にドイツ人が都市住民のうち多数派を占めることがあり、コペンハーゲンを含む島嶼部ではドイツ人が手工業や商業で優位を占めていた (Dollinger, 1964; 奥村他訳, 2016: 48)。したがって、ハンザ商人と地元住民との交流は盛んに行われたと考えられる。

系統関係が近い両言語は類似度が高く、相手の言語を学んだことがなくとも相互理解がある程度可能だったと見られる (cf. Braunmüller, 2006, 2007)。そのように類似度の高い2つの言語が接触すると、低地ドイツ語話者によるデンマーク語の (第二言語としての) 不完全な言語獲得によって、本来デンマーク語では文法的ではなかった語順が使用されるようになったと考えられる。Thomason and Kaufman (1988) は、干渉 (interference) が起こると、標的言語 (target language) を不完全な形で習得することで標的言語を誤った形で用い、それが標的言語の母語話者に伝わっていくと述べている。デンマーク語と低地ドイツ語の接触においては、低地ドイツ語からデンマーク語への干渉が起こったと考えられる。すなわち、従属節の先頭で [S-Neg] の語順が見られる頻度が高かったことから、低地ドイツ語話者がデンマーク語を使用する際、自分の母語の語順を適用したと推定される。そして、低地ドイツ語話者の第二言語としてのデンマーク語の不完全な言語獲得によって使用された新しい語順を、デンマーク語話者が取り入れたり、低地ドイツ語話者とデンマーク語話者の間に生まれた子供が母語の規則として獲得したりすることで、文法変化につながったと言える。

また、この語順の定着を後押ししたと考えられるデンマーク語本来の用例として、中世デンマーク語の文体的前置 (stylistic fronting) が起こった主格関係代名詞節が挙げられる。主格関係代名詞節や非人称の文のように、主語位置が空白である場合、その位置に節内の後方に置かれる要素が前方へ移動する (Holmberg, 2017)。主格関係代名詞節の例は以下の通りである。

(9) vatn hvært, ær æi ær mæþ damme fæst

water every which not is with dam closed

「ダムによってせき止められていない全ての水」 (Skånske Lov; Falk and Torp, 1900: 296)

このように、[主格関係代名詞－否定 (æi)－定動詞] と否定辞が定動詞の前に現れる語順は、この中世低地ドイツ語の語順と類似しており、この語順が低地ドイツ語の語順を受け入れる素地となった可能性が考えられる。

中世から近世初期にかけてのデンマーク語のテキストでは、従属節における V2 語順が非常に多かった (Braunmüller, 2006)。それに対して、上で見たように低地ドイツ語の従属節では V2 語順の節は少ない。したがって、低地ドイツ語の従属節における定動詞と否定辞は、それまでのデンマーク語では一般的ではないような位置に頻繁に現れていたと見られる。

よって、低地ドイツ語の従属節に頻出する [補文標識－主語－否定－(その他要素)－定動詞] という語順を受け、デンマーク語話者は、節全体を作用域とする否定表現を節のより左側、すなわち定動詞より前に置く語順を許容したと考えられる。実際、上で述べたように少なくとも 1500 年以降の資料では、

定動詞の繰り上げがある語順とない語順の例が混在しており (Sundquist, 2003) 、両者の語順はともに許容されていたことが見て取れる。また、Thomason and Kaufman (1988: 55) は、語順はたとえ変化しても表す統語的機能は変わらないため、最も借用や言語交替によって習得されやすい統語論的特徴であろう、と述べている。デンマーク語の場合も、同様の理由で本来一般的ではなかった語順が許容され、従属節における語順の変化につながったと考えられる。さらに、この新たな語順が許容される土台となりえたのは、中世デンマーク語にも元々存在した、類似の語順の従属節である。そして、この語順を、次の世代のデンマーク語を母語として獲得する者たち (子供たち) が「従属節では定動詞の移動 (VR) が起こらない」と、定動詞に関する語順の規則として再解釈することで、定動詞の移動に関するパラメータの値が変化し、規則が変化したと結論付けられる。

#### 4.2. 変化の開始時期について

中世デンマーク語から近世初期デンマーク語にかけて、Sundquist (2003) の調査結果を参照すると、上述の通り、少なくとも 1500 年以降はすでに変化の最中であつたことが分かる。VR が起こっている、すなわち [定動詞-副詞] の語順は 1500-1550 年の資料のうち 42% の例が見られ (Sundquist, 2003: 242) 、VR の起こる古い語順と、VR の起こらない新しい語順とが共存していることが分かる。また、中世デンマーク語資料の従属節でも定動詞が第 2 位より後ろに置かれる語順がなかったわけではなく、その動詞の位置について、Braunmüller (2006) はドイツ語の影響だと考えている。

1500 年以前の中世のデンマーク語資料については、ラテン語から翻訳されたものが多いという点で、単純に扱うことができず、また、宗教的なテキストや法律文書も多く (cf. Rossel, 1992) 、話し言葉における変化がどれほど反映されているのかについては要検討である。しかし、Braunmüller (2006) の示す通り、中世のデンマーク語において低地ドイツ語が語順に影響を与えていた可能性は高く、その場合、変化が開始したタイミングはハンザ商人との接触が盛んになったときであると考えられる。

#### 5. 結論と今後の課題

本発表では、ReN コーパスを用いた調査を通じて、中世低地ドイツ語がデンマーク語の従属節語順の変化に影響を与えた可能性を示した。また、デンマーク語使用地域へ移住したハンザ商人と地元住民との接触とデンマーク語元来の語順を通じて、文法変化に至るまでの経緯を考察した。

翻訳された資料が多く、扱いが単純にはいかない中世デンマーク語の資料を適切に分析し、低地ドイツ語との接触の影響をより詳しく調査することと、言語接触以外の考えうる文法変化の要因とを適切に比較検討し、その実態に迫ることが今後の課題である。

##### 【使用したコーパス】

「ReN コーパス」:

ReN-Team. 2019. “Referenzkorpus Mittelniederdeutsch/Niederrheinisch (1200-1650).” Archived in Hamburger Zentrum für Sprachkorpora. Version 1.0. Publication date 2019-08-14. <http://hdl.handle.net/11022/0000-0007-D829-8>.

本コーパスのうち、Lübisch (リューベック方言), Nordniedersächsisch (北低地ザクセン方言), Ostelbisch (東エルベ方言) の資料を調査対象とした。

## 【資料名】

- Brem.\_StR\_1303,04\_Abschrift: Bremer Stadtrecht, 1303/04, Abschrift  
Buxteh.\_Ev.: Quatuor Evangeliorum versio Saxonica, 2. H. 15. Jh.  
Lüb.\_Dod.\_Dantz\_1489: Des dodes dantz, Lübeck: Mohnkopf, 1489  
Lüb.\_Passional\_1488: Jacobus de Voragine: Passional, Lübeck: Steffen Arndes 1488

## 【二次文献】

- Allan, Robin, Philip Holmes and Tom Lundskaer-Nielsen (2000). *Danish: An Essential Grammar*. New York: Routledge.
- Braunmüller, Kurt (2006). Wortstellung und Sprachkontakt: Untersuchungen zum Vorfeld und Nebensatz im älteren Dänischen und Schwedischen. *Amsterdamer Beiträge zur älteren Germanistik*, 62 (1), 207-241. Amsterdam: Rodopi.
- Braunmüller, Kurt (2007). Receptive multilingualism in Northern Europe in the Middle Ages. In: Jan D. ten Thije and Ludger Zeevaert (eds.) *Receptive multilingualism: Linguistic analyses, language policies and didactic concepts*, 6, 25-47. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- Breitbarth, Anne (2014). Dialect contact and the speed of Jespersen's cycle in Middle Low German. *Taal en tongval*, 66 (1), 1-20. Amsterdam: Amsterdam University Press.
- Dollinger, Philippe (1964). *La Hanse: XIIIe-XVIIe siècles*. Paris: Édition Aubier. (ドラレンジェ, P. 高橋理 (監訳). 奥村優子・小澤実・小野寺利行・柏倉知秀・高橋陽子・谷澤毅 (共訳)(2016). ハンザ: 12-17 世紀. 東京: みすず書房) / Falk, Hjalmar and Alf Torp (1900). *Dansk-norskens Syntax*. Kristiana: Aschehoug.
- Jensen, Britta (2001). On sentential negation in the Mainland Scandinavian languages. In: Maria Liakata, Britta Jensen and Didier Maillat (eds.) *Oxford University Working Papers in Linguistics, Philology and Phonetics*, 6, 115-137. Available online at: <https://www.ling-phil.ox.ac.uk/files/owp2001.pdf>
- Haugen, Einer (1976). *The Scandinavian Languages: An Introduction to Their History*. London: Faber and Faber.
- Holmberg, Anders (2017). Stylistic Fronting. In: Martin Everaert and C. Van Riemsdijk (eds.) *The Wiley Blackwell Companion to Syntax*. Second Edition.
- Peters, Robert (2000). Die Diagliederung des Mittelniederdeutschen. In: Werner Besch, Anne Betten, Oskar Reichmann & Stefan Sonderegger (eds.). *Sprachgeschichte. Ein Handbuch zur Geschichte der deutschen Sprache und ihrer Erforschung*. Berlin & New York: Mouton de Gruyter. 1478-1490.
- Platzack, Christer (1986). COMP, INFL, and Germanic word order. In: Lars Hellan and Kirsti Koch Christensen (eds.), *Topics in Scandinavian Syntax*. 185-234. Dordrecht: Springer.
- Platzack, Christer (1988). The emergence of a word order difference in Scandinavian subordinate clauses. In: Denise Fekete & Zofia Laubits (eds.), *McGill Working Papers in Linguistics: Special Issue on Comparative Germanic Syntax*. 215-238. Montreal: Department of Linguistics, McGill University.
- Rossel, Sven H. (ed.). (1992). *A History of Danish Literature*. Lincoln: University of Nebraska Press.
- Sundquist, John D. (2003). The Rich Agreement Hypothesis and Early Modern Danish embedded-clause word order. *Nordic Journal of Linguistics*. 26.2, 233-258. Cambridge: Cambridge University Press.
- Thomason, Sarah G. and Terrence Kaufman (1988). *Language Contact, Creolization, and Genetic Linguistics*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.